とっても，この指摘は有益であろう。

第五章「海の旅と自学」・第六章「陸の旅と自学」・第七章「新しい問題」は，それぞれ師の柳田國男の著書『海南小記』・『後狩詞記』・『遠野物語』を題材としている。

ここでは，柳田自身が旅で得た閃きを「自学」として，どのように柳田民俗学の形成に生かしたかを著者の解釈から述べている。『海南小記』からは，常民への視線と周圏論という民俗学的法則の提示を読み取り，『後狩詞記』からは，山間部に残された伝統文化の共通性を指摘するが，同時に柳田自身が自立を目指した『海南小記』以降の旅の記録と，それ以前の作品とでは「覚悟のちがい」が存在しており，自学の目的を明確にして，それに邁進することの必要性が強調されている。

一方，『遠野物語』からは，幻覚と残像の解釈についての新見解が述べられる。まず，幻覚と残像の差異として，幻覚は目を閉じれば見えなくなるものであるが，残像は目を閉じても，なお見えるという感じがあると区別する。そして，『遠野物語』に出てくる「まぼろし」を見るという現象は，栄養不足から来る急性血糖値低下症候群であろうと結論づけている。

この症状は紀和の茶粥常食地域や九州島原半島にも顕在化するといい，このような調査研究には医学・精神科学などの協力も不可欠とされるが，この解釈は著者自身の入院体験に由来するとはいえ，著者の関心領域の広大さを物語るものであろう。

第八章「車窓の観察と自学」では，南イタリアの土壌侵蝕の観察が述べられる。この問題は，理学博士論文となった「はげ山の研究」の延長上に位置づけられるものであるが，まさしく個々の調査研究は長期的な研究課題の一部となるものという著者の姿勢の顕現といえよう。

そして，地中海型土壌侵蝕の背景には，地域特有の歴史と現状が存在するという解釈もまた，「はげ山の研究」と共通点を有しているが，ここに提示された地理学的調査研究は，観察中に閃いたテーマをその後長い時間と労力とを重ねて研究してゆくやり方であり，それは主として柳田國男から指導されたものであるという。これは，単発的な調査研究が散在する地理学の現状への警鐘ともいえよう。

本書の巻末には，「ギリシァ人の考え方について」が付されている。この付章は著者の大英博物館における一週間もの観察から得られた成果であり，十年余り以前の観察とはいえ，著者の行動力と集中力には改めて感嘆させられた。この付章は博物館の展示物を，それほど重要視しない地理学者への問題提起でもあろう。

以上，いささか冗長な紹介に過ぎたが，本書は著者の自伝的側面も有しており，「自学」を目指す人々のみならず，後進の地理学者と民俗学者にとっても，方法論的に大いに刺激となる書物である。

とりわけ，近年はかつてのような地理学と民俗学の連携が薄らぎつつあると評者には感じられるため，両者の学際的協力にとっても有益な出版であることは疑いない。

最後に，評者自身も，千葉先生の数多くの著作を味読する中で，地理学のみならず民俗学への関心を開かれた一人であり，本書の紹介の機会を与えていただいたことに感謝しつつ稿を終えたい。

（岩鼻通明）

梶川勇作著：『近世尾張の歴史地理』

企画集団NAF　1997年11月

A5版　212ページ　1905円（本体）

著者はかつてニュー・ジオグラフィーに大きな影響を与えたペーター・ハゲットの著作を翻訳して我が国に紹介するなど，新しい地理学の普及にも貢献をしたことで知られている。本書を構成する諸論の多くは1980年以降執筆されたものであるが，基本的には著者の名古屋在住時にあたためられたであろう近世尾張に関する歴史地理学的業績である。出版以来2年余の月日が経過し周知の書となっているが，あらためてその内容を紹介することとする。その構成は以下の通りとなっている。

序　章　近世の尾張
第1章　尾張地方の近世の新田村
第2章　近世の東海道佐屋路と佐屋宿
第3章　近世の知多郡における給知と地頭
第4章　丹羽郡の近世村の土地条件
第5章　尾張西南部の近世村の土地条件
第6章　近世後期の名古屋近郊の土地条件

章立てから察せられるように，本書は近世尾張の村に焦点を当てた地誌的研究書であるといえよう。以下簡単に各章の内容を紹介していく。

まず序章において尾張藩成立の経緯を紹介した後，本書の中心的資料となっている尾張藩の地誌である『寛文村々覚書』と『尾張徇行記』につい

て述べ，概略的に石高・耕地面積・戸数・人口などを指標とした郡別比較を行っている。

第1章では新田開発において，主に尾張東部丘陵地帯を中心とする台地開発と伊勢湾に臨む干拓新田の開発について述べている。尾張藩の場合も新田開発の最盛期は近世前期にあったとし，個別新田の開発の経緯が紹介されている。尾張藩独特の「給人自分起新田」や藩営・豪農・町人請負による新田など種々の新田開発の事例が示されている。また主要新田の一覧が表として示されている点も読者にはありがたい。本章の末で展開されている新田村の発展過程では，無人・無高村から始まって無人村あるいは無高村という中間段階を経て，古村と同じ条件を持つ基本型の村へと到達するという見解が示されている。

第2章では，東海道の迂回路として利用された佐屋路を例としながら，宿駅制度設立の経緯と宿の運営，運賃，渡船の他，助郷（尾張では寄付（よせつけ）という）分布などを紹介している。佐屋路は幕府の道中奉行が直接支配した五街道付属街道であったが，実際の宿駅運営には尾張藩が関与する部分が多かった街道である。従来の街道に関する研究は幕府の直接支配をめぐるものが多かった点で，やや性格の異なる佐屋街道の研究は新たな知見を読者に与えてくれる。佐屋街道を構成する各宿駅に関して，尾張藩による伝馬制度や宿駅経営の具体的様相が語られている。また渡船場でもある佐屋宿が旅客や積み荷をめぐって，三河の吉田宿渡船や伊勢の港の村々を相手として紛争を起こしたことが示されており興味深い。土砂の堆積にともなう港機能の衰微に起因する佐屋宿の移転計画の経緯も知ることができる。

第3章では，地方知行の形態を残していた尾張藩の給知制について，知多郡を事例として検討している。主要な給知の地頭についてその給知拝領の経緯を述べている。尾張では享保年間に各地で六斎市が開設されたが，開設場所の免許において大身の家臣の在所が優先されていたという。村絵図から当時における大身家臣の在所の屋敷の様子がうかがわれる。知多郡は8割以上が蔵入地となっており，尾張藩の地方知行制度の中では特異な存在であったが，この要因についても歴史的背景や耕地条件からの考察が加えられている。

第4章は，丹羽郡を事例とした藩政村の土地条件に関する内容である。丹羽郡域は犬山扇状地地帯にあたるため，畑地が多くそのため自然堤防地域や洪積台地に比べて住民一人当たりの石高や年貢率が相対的に低かった。また丹羽郡の場合は，知多郡とは対照的に蔵入地に対して給知高が高かった。丹羽郡は畑作が中心であったため，多様な畑作物が生産されていたが，なかでも蚕糸生産に関って桑の栽培が目を引く。農家の副業としての竹細工や荷造り，織物生産などがあったことを紹介している。本章の補論として丹羽郡小折村に本拠を置く一給人について，給知分布を分析し尾張藩の地方知行の一端を具体的に示している。尾張藩における分散知行の目的は知行地の不平等を回避することであったため，一村内が同じ年貢率（定免）であったならば，場所による差異は生じない。このことが尾張西部に見られた地概と呼ばれた地割制度と関係するのではないかという指摘は興味深い。

第5章では，第4章の丹羽郡と対照させて，三角州と海面干拓地からなる尾張西南部の海東・海西郡（現海部郡）についての近世村の土地条件に関する内容である。両地域の自然条件の差は新田開発の形態においても差異を見せており，丹羽郡では切添開発が主であったのに対し，本地域では大規模な海面干拓が中心であったことなどが示されている。本章では村別区画入りの密度図（階級区分図）が多用されている。尾張西南部は多くの河川があるが，これらの諸河川についてはその河況の変化などを述べるとともに，用水として作られた宮田用水などを紹介している。南部の交通手段としては船が重要となり，渡河の手段としても農業用としても船が利用された状況が述べられている。海西郡赤目村に本拠を置く横井氏の知行地についての分析が本章の補遺として収められている。赤目村絵図も利用しつつ景観論的な分析がなされている。

第6章は名古屋城下町周辺の村々についての土地条件に関する内容となっている。名古屋城下町近郊の村々の内，町奉行支配下に置かれた村々が「町続き」地であった。この町続き地10か村の人口は幕末には3万人に達し，城下町の町中の人口に匹敵していた。これらの村々では商家が増加し農家が衰微していった様子が描かれている。町続きの村々の内西部の村々には侍屋敷が多く，南部には侍屋敷の他に町人町が広がっていた。さらに城下町から各地へ通じる主要街道に沿って町屋が連続していたことなどが，明治中期の地形図とともに示されている。農地の多様性については，人

口一人当たり石高を指標としつつ，村内耕地と村外住民との関係を３つの型に分類整理している。尾張においてもっとも一般的に認められた型は，村内の耕地を村外住民が小作する形態であるという。最後に古村と新田を比較しながら給知率の差を検討している。

末尾には本文中で引用された文献一覧が掲載されている。これらはいずれも近世尾張の歴史地理を研究する際の基本的文献となろう。また索引が３ページにわたって掲げてあり，難読地名にはふりがなが付されている点も読者にとってはありがたい。

以上，本書の内容を章毎に概観した。本書では，豊富で多様な図的表現を駆使しながら分析がなされているので，主題図について若干の感想を申し述べたい。各所に挿入された村絵図から読みとられた当時の村の景観が的確に述べられている。本書は著書の既発表の論考を再構成する形でまとめられているため，図的表現の不統一さがないではない。例えば，人口一人当たり石高や水田率が，面積図で示されていたり階級区分図で示されていたりする。異なった地域での図的比較を行おうとした場合にはやや不便さを覚える。しかしこうした点はいうまでもなく本書の真価になんら影響を与えるものではない。著者の研究において評者が感心させられるのは，近世村の境界を入れた図をベースマップとされた点である。どのような方法で近世村の境界線を描かれたのかについては本書では触れられていないが，村別データの得られる尾張藩の研究にあっては，このような図は大変重宝である。なぜなら村の位置だけでは，密度図のような図を描くことができないからである。

近年，各地の市町村史などにおいて絵図を用いた研究が数多くみられるようになった。各地の歴史を描くことは，過去の地誌を描くことと深く関わることになろう。ただ時間の流れに沿って描かれる地域の歴史では味気ない。やはり地域の歴史を知るには，地域のある時間断面における地誌を描くことが重要ではなかろうか。本書もこのような意図を持って書かれているのではなかろうかと評者は推測している。

尾張藩には，ほぼ全域にわたって近世の地誌書が存在するとはいえ，それら資料を分析し再構成していくことは容易ではない。筆者の尾張藩に関する深い造詣をもってはじめて上梓可能な書といえよう。本書は尾張という一地域を扱ってはいるが，そこに書かれた内容は多様である。その多様さは，筆者の歴史地理学者としての豊富な識見を物語っている。本書は近世尾張藩の優れた地誌的研究書であるとともに，歴史地理学の教科書としても重宝するものとなっている。本書を読めば，藩政時代の知行制度のあり方，新田開発の諸形態，近世村の特色，農業や農間余業のあり方，交通制度，城下町とその都市化などおよそ歴史地理学が手がけるかなりの分野に関して，その知識を深めることができる。本書が尾張藩研究に大きな貢献をした書であるとともに，それでいて比較的平易で読みやすい書となっていることも最後に付記しておく。

（岩崎公弥）

高瀬　正著『埼玉県の近世災害碑』

ヤマトヤ出版（自費出版）　1996年８月
Ｂ６版　205頁（問合先：埼玉県比企郡小川町青山439，高瀬正，TEL0493-77-6443）

歴史地理学会の平成11・12年度の共同課題は「災害・防災の歴史地理学的アプローチ」である。そこでは第一線の研究者による歴史災害に関する最新の研究が次々に紹介されつつある。歴史地理学にとって歴史災害の研究が必要不可欠であり，きわめて今日的課題であることは，すでに広く認められているところであろう。しかし，必ずしも研究成果が蓄積されてきたとはいえない。それゆえに，今回の共同課題の設定によって，歴史災害研究の飛躍的な前進が期待される。

もちろん，歴史地理学界に歴史災害の研究がなかったわけではない。これまで指針を与え続けてこられたのは，歴史地理学における歴史災害研究のパイオニア菊池万雄先生である。『日本の歴史災害－江戸後期の寺院過去帳による実証－』・『日本の歴史災害－明治編－』（古今書院）などを世に問い，その後も「地震ジャーナル」などの雑誌に研究成果を公表してこられた。先生の徹底した資料所在調査に基づく緻密な実証研究は，単に災害の実態復原のみならず，寺院過去帳による死亡者の分析を試みられたことからもわかるように，つねに被災者への慈しみに満ちた眼差しのなかで歴史災害を論じられたのである。災害がなぜ起こったのかということよりも，災害によって何が引き起こされ，これに人間はどのように対処したかに，先生は強い関心を示されたといえよう。

菊池万雄先生は長らく日本大学文理学部地理学